

☆子どもたちは、どの県をどの県と誤認しているのだろうか？

■県の誤認には、いくつかのパターンがある

前ページ、見開きの表を見てもわかるとおり、県名と位置に関する誤答は、基本的には隣接・近隣県内での間違いが大半を占める。これは想像に難くない結果であったが、中には、場所や地域が大きく異なる県の名前が挙がっているケースも散見された。

誤答を分析した結果、誤答には以下のように、いくつかのパターンがあることがはっきりした。

- (i) 近隣県と誤認（勘違い）している
- (ii) 同じ漢字が使われている県と誤認している
- (iii) 県庁所在地名と県名を誤認している
- (iv) 地方名と誤認している
- (v) その他・例外

おおよそ、上記の(i)を中心にして、それに(ii)から(iv)のパターンが組み合わさって、各県の誤答を形成している。

以下に、それぞれの誤答パターンについて検証してみる。

◎誤答パターン (i)

(i)は、一番多いパターンである。特に隣接する県と誤認しているものがほとんどである。誤答内占有率（各県の誤答数全体の中でその回答が占める割合）が30%を超える県名を挙げると以下のとおりである。

順位	回答すべき県名と回答（正答）と（誤答）	誤答内占有率	その誤答数	その県の総誤答数
①	岩手を秋田と回答	48.3%	1,184	2,450
②	島根を鳥取	45.2%	796	1,760
③	佐賀を長崎	38.6%	529	1,372
④	高知を愛媛	37.5%	595	1,588
⑤	鳥取を島根	32.5%	372	1,143
⑥	京都を大阪	31.1%	359	1,155
⑦	宮崎を熊本	30.7%	477	1,555
⑧	岡山を広島	30.6%	400	1,309

誤答内占有率が高い県（前の表でいうと、秋田や長崎のこと）は、子どもたちの頭のなかに、「（誤答した）A県は、このあたりにある」というイメージが、他の県に比べて、より強く残っているということができる。鳥取県と島根県などは、かなりの子どもが「一方が鳥取であり、残りの一方が島根である」という認知が出来ているのだが、どちらが正しいのかが詰め切れていない状態であることが、この調査からも明らかである。

また、(i)に関する誤答の中でも対照的なのが、本州各県と、四国・九州各県での誤答の違いである。

本州は、他地方の県の誤答が比較的多く混在するのに対し、四国・九州内の各県は、それぞれの地方内の県での誤答がその大半を占める。

四国各県における誤答の大半が、香川・徳島・愛媛・高知の四国4県で占めているのをみればその傾向がよくわかる（ただし、四国の場合は、パターン(ii)の「愛媛」と「愛知」との混同が多いので、実際は四国4県+愛知の5県が誤答の大半を構成している）。つまり、四国・九州は、「一つの大きな島で区切られた地方」として明確に認識されているが、その地方を構成する県の県名となると、認知度が落ちるということがいえるだろう。

もちろん本州の各県についても、〇〇地方に所属するという認識はある程度なされているとはいえるが、四国・九州ほどは、子どもたちの頭の中で明確に区分が出来ているとはいえない。

◎誤答パターン (ii)

(ii)は、同じ漢字が使われている県名同士で誤認しているパターンである。パターン(i)のところでも挙げたが、四国地方に「愛知」という回答が多いのは「愛媛」と誤認しているためであり、東北地方に「山梨」の誤答が多いのは、「山形」と誤認しているためであると考えられる。

他にも「宮城」と「宮崎」、「福島」と「福井」と「福岡」、「東京」と「京都」、「神奈川」と「香川」、「滋賀」と「佐賀」、などを誤認している回答が散見される。

また「青森」を「青山」、「岩手」を「石手」・「岩森」など、と誤答する例も少なからず見られた。

なお、漢字の間違いが多かった県が、「大阪」と「鳥取」であり、それぞれを「大坂」・「取鳥」と書く子どもがかなりいた。

ただし、このパターンにあてはまらず、よくわからないこともある。たとえば、東北地方各県に「山梨」という「山形」と誤認した誤答が広く分布しているのに対し、「宮城」を「宮崎」と誤答する子どもは「宮城」以外ではほとんどみられない。

また、「山形」を「山梨」と誤答する子どもは多いが、「山口」と誤答する子どもはほとんどいないというように、同じ漢字が使われている県名であっても、誤答にのぼる県とそうでない県にわかれる、などである。

◎誤答パターン (iii)

(iii) の誤答パターンは、一部の県でしか見られない。県名と県庁所在地名が異なる県は、47県中17県（さいたま市を含めると18県）であるが、そのうち、誤答内占有率が高く、顕著だったものは「札幌」・「横浜」・「名古屋」・「那覇」の4例のみである。表中には「盛岡」・「仙台」・「金沢」・「神戸」等も顔をのぞかせてはいるが、全体で見ると非常に少数であり、上記の4都市との差は大きい。

これは、**小学校段階において、県庁所在地の指導があまりなされていないことにも関係があると考えられる（小学校段階では、県庁所在地を認知するところまでは求められていないので、問題はない）**。誤答となって顕著に現れた札幌などは、それだけ認知度が高い地名であるということがいえよう。

◎誤答パターン (iv)

地方名を回答する (iv) のパターンは、九州地方以外ではほとんどみられない。あってもごく少数であり、前ページの表中に出てくるほどの回答数は出てこなかった。

しかし、九州と同じく、島全体が一つの地方としてくくられている四国地方の各県を「四国」と回答したものが皆無に等しいのに、なぜ九州地方の県のみ「九州」という回答が目立つのか、原因は不明である。わからないから適当に答えたという側面はあるのかもしれない。

◎誤答パターン (v)

(v) その他の誤答は、はっきりとした原因は不明であるが、推測の範囲で検討してみた。いずれも**子どもたちが持つイメージと密接に結びついていると考えられる**。

・「長野」を「東京」・「大阪」と誤答する

→ 長野県が日本のほぼ真ん中に位置し、しかも巨大で目立

つ県であることが原因ではないか。子どもたちの頭の中に「中央にある＝日本の中心都市」というイメージがあるのかもしれない。また、長野のちょうど中央部に、ほぼ丸い形をした諏訪湖が位置し、それを「首都」や「日本の中心」のマークと思いこんだ可能性も考えられる。

・東京周辺を「大阪」、大阪周辺を「東京」と誤答する

→ 日本の2大都市として「東京」・「大阪」を知ってはいるが、関東・関西どちらにあるかを混同しているためではないか。子どもたちの頭の中に、東京と大阪の中心性のイメージが備わっていることは、まず間違いないだろう。

・北陸地方の各県（富山を除く）を「鳥取」と誤答する

→ 鳥取に対し「日本海に面した細長い県」というイメージを、子どもたちが強く持っているのかもしれない。

■どのようにして県の誤認を少なくしていくか

「このように指導すれば、確実に認知できる」という特効薬的な指導法は、残念ながら、ない（と思う）。**指導を着実に繰り返し、学習を積み重ねていくほかないのではなからうか。**

それには、**段階を追う必要がある**ことはいうまでもない。まず、自分の住む県、そして、隣接する県、自分が住む県と同じ地方にある県、学習で出てきた県、とひろげていく。また、1回認知したとしても、忘れないように、**折にふれて思い出させる作業や発問も必要**になってくるだろう。

ただ、子どもたちの心理を考えれば、**無理な詰め込みは避け**るべきである。**時には、クイズやパズルなど、楽しみながら取り組める工夫**があると、拒否反応も少なくなり、前向きに取り組もうとする子どもも増えるのではなからうか。

この調査を通して、子どもたちのウイークポイントや、県名認知の特徴が、少しではあるが、明らかになったと思う。それらに注意して、いっそうきめ細かな指導が展開されることを期待したい。